えぬぴおん　第 6 号
2003 年 8 月 13 日

特集
子どもたちの健やかな育成を願って

子どもの芸術文化・スポーツの市民活動を追って

子どもは社会の鏡だ
私たち大人が歩む姿を見ながら
育ってゆくものだ
いいかげんならいいかげんな姿で
残酷なら残酷な姿で
あきらめ、絶望しながら…
子どもは社会の宝だ
私たちが子どもみんなを
ちゃんと愛したら
やさしく健やかに育っていくものだ
あたたかい大人たちがいる場所に
あたたかい子どもがいるものだ

「夢はオリンピック！広がれスポチャンの輪」

札幌市スポーツチャンバラ協会西区支部　支部長　鈴木佳明さんに聞きました

　スポーツチャンバラ（通称スポチャン）とは、かつての「チャンバラごっこ」をルール化した新しい武道であり、「安全・公平・自由」を基本原則とした大人から子どもまで楽しめるスポーツです。小太刀・長剣など、空気の入った剣状の用具を使って打ち合う為、誰でも安全に楽しむ事ができます。札幌市スポーツチャンバラ協会（菅原通有会長）は平成７年に誕生し、現在では本部及び市内近郊７支部において、競技の普及に力を注いでいます。
　今回は、少年少女剣士が元気いっぱい活躍しているという、西区支部におじゃましました。

【目指せ！オリジナル技】

　「当てれば勝ち、当たれば負け、相打ちは両者負け」
　ルールはいたって単純明快。でもだからこそ、自由な自己表現が可能なスポーツなのだと鈴木佳明支部長は言います。
　「自分流のオリジナル技（施術）を創造でき、それを発揮できる機会と場所（各種大会等）が用意されています。実際に使うことによって技の微調整が出来、完成度を高めていけます。また普段から他の剣士の動きや技を観察することによって、より精度の高い技として発展させる事も可能です。観察する眼が養われると物事の本質が見えてきます」
　なるほど、順番を待っているチビッ子剣士達も、大きな声で仲間を応援しています。「見る」事の重要性を、自然と理解しているのでしょう。

【自らの心による審判】

　スポチャン精神の一つに「自心審判」という言葉があります。打たれたこと、負けたことをいさぎよく自ら認め、さわやかに相手をたたえよう、自らが自らを自らのために審判しよう、という考え方です。
　先生たちはこの「自心審判」の重要性を繰り返し教えています。
　「元来このスポーツには審判は要らないと言われています。打たれたことは、打たれた本人が一番よく認識できるからです。しかし技術的に未熟だったり、勝ちに執着すると正しく認識できず、意志表示も出来ません。必要以上に勝ち負けに執着しない事。他者に影響されず、自分の心に正直に問いかけ客観的な答えを出せる事。子どもたちがそういった『力量（度量）』を身に付けていけるよう指導に努めています。勝負に固着しなければ、自分より技術が高い剣士と対戦し負けたとしても、得るものが多くあることに、子ども自身が気付きます」
　インストラクターの鈴木陽一先生対中学･高校生剣士６名による団体戦を見学しました。

1 対 6 での激しい打ち合い、緊迫の攻防戦は迫力満点です。動きが速いため、私のような素人には勝敗が見分けられません。しかし一瞬のぶつかり合いのあと、彼らは次々と自ら場外へ出ていきます。打たれたことを正しく認識できる『力量』を持っているのでしょう。だからこそ団体戦が可能なのです。「自心審判」の教えは、少年少女剣士達にしっかりと伝わっているようです。

【広がれ！スポチャンの輪】

　少年少女剣士の練習は真剣そのもの。一生懸命をぶつければ、一生懸命が返ってくる。だから疲れていても、道場に来ると元気になるんです、と鈴木支部長は言います。
　「スポチャンで知った感動を、それぞれの場で、必要とする多くの人に伝えていって欲しい。今後スポチャンという競技が成長していけるかどうか、全ては今いる少年少女剣士に委ねられています」
　今年 10 月に行われる第 58 回静岡県わかふじ国体において、スポチャンはデモンストレーション競技に選ばれました。多くの人たちにスポチャンの魅力を知ってもらうビッグチャンスですね。もし国体正式競技になったら、この道場から国体選手が誕生するかも？その日を目指して、頑張れ！少年少女剣士達！！
（取材・文　汲田佳奈）

札幌市スポーツチャンバラ協会
生徒募集・見学希望者受付中　詳しくは HP を！
電話／011-886-6000　FAX／011-886-2000　URL／
http://www5e.biglobe.ne.jp/~danchou/

ちびっこも舞台に立つと大役者
～なんで今どき歌舞伎なの？～

札幌・篠路中央保育園　篠路子ども歌舞伎

　JR 学園都市線、篠路駅近くに札幌市のモデル地区福祉ゾーンがある。そこに、子ども歌舞伎に取りくんで 18 年目の篠路中央保育園がある。
　誕生と生い立ち、今なぜ子ども歌舞伎かを、林茂子園長と長津美代主任保育士に伺った。伝承芸能への熱い思い、労苦と喜びそして夢をご紹介する。

演目
◎創作こども五人衆
◎勧進帳
◎忠臣蔵
　三段目　殿中人傷の場
　四段目　判官切腹の場
◎白浪五人男
　稲瀬川勢揃いの場

【手作り歌舞伎の復活めざす】

　明治から昭和にかけて篠路太平地区では、農閑期に農村青年達が手作りの歌舞伎を演じていたのが始まり。しかし時代の移り変わりと共に途絶えていった。
　1985 年、篠路に待望のコミュニティセンターの誕生、そのこけら落としで地元の有志が「白浪五人男」を上演し、それがきっかけとなって手作り歌舞伎復活を目ざす保存会の発足となった。
　同年 11 月、保育園創立 30 周年と認可 15 年を祝う祝賀会で、園の全職員 12 人で創作歌舞伎「保育園五人女」を上演した。恥ずかしさも抵抗感もあったが、拍手喝采を受けた。そして、やってみて得た感動を子どもたちにも体験させられないだろうかと思ったことがきっかけとなった。
　しかし、職員の中には歌舞伎を詳しく知る人もなく、全くの手探りで秋のおゆうぎ会に発表しようと取り組んだのが最初であった。
　年長組になると、いろんな事に挑戦する力がついて、少し程度の高い事に力を出してみたくなる。そして、子どもたちは、出来るまで何度でも繰り返すことに喜びを持ち始める。
　創作「五人衆」は、一人一人の個性や生活遊びの中から生まれた様子を七五調に並べて、大きな声で訴え見得を切る。このしぐさが好評で、今では 4 歳児の定番となった。これが年

長組になっての、篠路子ども歌舞伎の本舞台のための下準備となる。

【日々の歌舞伎の練習】

　練習は月曜日、金曜日の週 2 回。その内の一回は、札幌にある劇団ペルソナの先生の指導を受ける。園長、主任保育士、そして担任は、篠路子ども歌舞伎の導き手となる。
　毎年 4 月には配役を決め、最初は台詞の暗唱をし、7 月には立ち稽古に入っていく。子どもたちは長い台詞もよく覚えるという。
　「勧進帳」は 1 時間という長編。座って、目を動かさない、といった難しい動作を身につけなければならない。だから、練習そのものが心と体の成長に多くの良い影響を与える。
　そして、子どもたちとの約束ごとがある。それは……
1、大きな声で元気よくゆっくりと言うこと
2、人のお話をしっかり聞くこと
3、ごあいさつをはっきりする
4、姿勢をよくし目はキョロキョロしない
　この事を毎日復唱し、あせらず、急がせず、みんなでひとつの事を作り上げていく大切さを話し伝える。これが子どもたちのグループ意識を高め、保育園生活にメリハリがつく。

【お遊戯会から民族芸能祭への参加】

　篠路子ども歌舞伎の発表の場もどんどん広がって、札幌こども劇場やまびこ座、かでる 2・7 ほか、1998 年には北海道の文化芸能発表で釧路へも行った。
　2000 年には国際民族芸能フェスティバルがきたえーるであり、今までの実績が高く評価され、5、6 才児の子どもが演じるものとして全国的にも高い技術があるとし、道地域文化選奨を受賞している。

　【衣装作りと小道具作り】

　舞台を創り上げるまでの裏方の仕事も知って欲しいと思う。歌舞伎は衣装からと言われているが、参考にしたのは「原色歌舞伎詳細」の一冊の本。この本に似た布地を探して足が棒に。遂には東京浅草まで布を求めて出かけ、トンボ帰りした事もあり、今でも役にあう布地探しに苦労している。
　衣装は子どもの年齢や体格に合わせなければならない。活発な動きに耐える作り方と工夫を重ねる。また、かつらにも苦労している。毛糸の張りぼてかつらが未だに活躍している。しかし、舞台化粧だけは大変難しく、保育園の発表会では、顔をつくらず素顔で演じるという。

　これらのいろいろな話を聞くと、保育のかたわら仕事とは思えない。子どもたちに対する深くて熱い情熱と歌舞伎への愛着なくしては出来ない仕事である。
　歌舞伎を作り上げる過程を通して、心と体を鍛え、次の時代へ歌舞伎の演技同様に、堂々と主役を演じて行って欲しいとの願いを込めて取り組んでいる。園長先生の心にさらに大きないくつもの夢がふくらみはじめているのを感じた。
（取材・文　棟方悦子）

篠路中央保育園
札幌市北区篠路 2 条 9 丁目 1 番 1 号
TEL　011-771-2117

公演のお知らせ
とき／2003 年 10 月 11 日午前 11 時　ところ／札幌市北区篠路 3 条 8 丁目 11-1　篠路コミュニティセンター　演目／〇白浪五人男　稲瀬川勢揃いの場

先生は「勝利の女神」一緒に成長するシステム

コンサドールズディレクター金子桂子さんに聞きました

　コンサドーレ札幌のオフィシャルダンスドリルチームであるコンサドールズ。ホームゲームでは素晴らしいパフォーマンスでスタジアムを盛り上げ、選手・サポーターから「勝利の女神」として愛されています。
　オールスターサッカー（8 月 9 日・札幌ドーム）という大舞台にむけ、練習まっただ中のコンサドールズに会いに行って来ました。元気いっぱい、とっても可愛いコンサドールズメンバー。すっかりファンになってしまいました！

【ピラミット型育成システム】

　コンサドールズは、ピラミット型の独自のシステムにより、子どもたちの指導・育成を行っています。スタジアムで踊っているのはピラミットの頂点に立つトップチームのメンバー（現在 7 名）。その下にサテライトチーム（トップチーム予備軍）、ユース（高校生以上）、ジュニアユース（小中学生）、キッズ（幼稚園）と続きます。ユース以上は実力により入れ替えが行われるという、とっても厳しい世界です。
　ユース以上はオーディションに合格することが必要ですが、ジュニア、キッズについては毎年春に行われるメンバー募集に申し込めば、コンサドールズの一員になる事ができるそうです。なんと男の子も OK だとか。今年はジュニア・キッズだけでも 150 人もいるそうです。かっこ良くてかわいいトップチームのお姉さんたちは、子どもたちに大人気なのです。

【彼女たちのもう一つの顔】

　スタジアムでは華やかに踊る彼女たちですが、実はもう一つ「先生」としての顔を持っています。トップ・サテライトチームのメンバーは、先生として子どもたちにダンスを教えているのです。まだ二十歳前後の彼女たちですが、その先生ぶりはとても堂々としたもので、指導者としての責任感や、充分なリーダーシップを感じさせます。子どもたちに教えることによって、彼女たち自身もまた成長するのだと、金子さんは言います。
　「単にダンスを教えるのではなく、子どもたちが挨拶・仲間づくり・協調性などを身に付けられるよう、指導していくのがコンサドールズの特徴です。自分自身がまず楽しみ、その楽しさを人に伝えていくように、と教えています」
　憧れのお姉さんたちに直接教えてもらえる子どもたちは、本当に楽しそう。小さな子たちも先生を見ながら、元気いっぱい踊っています。そして教える側の先生たちも、子どもたちから学ぶ事がたくさんあるようです。

【これからの目標】

　スポーツエンターテイメントの一層の普及と人材育成を目指し、現在金子さんを代表に、NPO 法人にする準備をすすめているそうです。更に広い地域、より多くの人たちの前でパフォーマンスをする場を作りたい、多くの子どもたちにコンサドールズと触れあうチャンスをもって欲しい。更には、現在トップチームで活躍する彼女たちの将来を見据えた上での選択です。

　「野球選手が引退後コーチになるように、コンサドールズも一線を退いた後、指導者として再出発する道があればいいと思います」

　と金子さん。彼女たちは、長年培ったダンスの実力は言うまでもなく、指導者としての実力も身に付けつつあります。しかしそれでもなお、将来それを生活の糧とするのは難しいのが現実のようです。今後 NPO 法人となる事によって、そういった選択肢が生まれるといいですね。

　現役のトップチームが先生となり子どもたちを指導するというシステムは、先生・子どもの両方に大きなメリットがあるように感じました。教えることによって教えられる。育てることによって育てられる。その繰り返しの中で、コンサドールズというチーム全体が、もっともっと前進していけるのではないでしょうか。

（取材・文　汲田佳奈）

スタジオ NEO　コンサドールズ事務局
電話・FAX／011-856-1135
E-メイル／Mailstaff-m@vmail.plala.or.jp

魂に届く太鼓の響きを
～昇るあさひのように輝きながら～

石丸流　札幌あさひ太鼓

　ドーンドーンカッカッカ、大音響で飛び込んでくる太鼓の音。激しくリズミカルに打ち下ろされるバチに体中にみなぎる汗。和太鼓をたたく子どもたちの姿はうーん、かっこいいぞ！
　1980 年石丸正雄氏を師匠として結成された「石丸流札幌あさひ太鼓」の練習場におじゃました。会員は幼児から小学生、中学生、社会人、お父さん、お母さんと幅の広いファミリーで構成され現在会員数は子ども 16 名、大人 12 名の 28 名だという。父である会長石丸正彦さんと共に 10 才から太鼓をたたき始めたという石丸学さんにお話をうかがった。

【子どもたちに「故郷」の思い出を】

　8 月は盆踊りの季節。あちらこちらの地域でやぐらが立ち、踊りの輪が広がる。輪の中心には和太鼓があってそれがなぜか嬉しく懐かしく響いてくる。
　札幌あさひ太鼓は北海道太鼓連盟の事務局。北海道には連盟未加入団体を含め、なんと 400 もの和太鼓の団体があるそうだ。
　同連盟加入団体 40 のうち子どもがメインの団体は 20 団体もあるという。
　今年結成 24 年目を迎える札幌あさひ太鼓は、1980 年に篠路あさひ団地で誕生。札幌市北区篠路地区の貴重な郷土文化遺産として次世代に継承するため、ひいては地域振興、次代を担う子どもたちに故郷の思い出つくりと、良い社会人に育ってほしいという願いをこめて活動を続けてきた。
　普段の練習のほかに、福祉施設への慰問演奏や、障害者グループとのジョイントコンサート、災害による被災地の人たちへの義援活動、地域活性化のためのイベントや町内盆踊りの手伝いなど年間 70 回あまりの演奏活動を行っている。
　92 年からはスウェーデンエコーグルッペン（身障者バンド）や諸外国の青少年団と交流演奏するほか、ハワイ公演も行っている。また、地域小中高校等へ出向き、和太鼓指導なども行う。
　演奏者として太鼓をたたくメンバーだけでなく、段取りをしたり、衣装を作ったり、歌い手などみんなで支えあって活動を続けている。

【どこに行っても恥ずかしくない礼儀正しい子どもに】

　27 歳のリーダー石丸学さんは、幼いころから父・正彦さんの太鼓をみてきたが、それほ

どの興味もなく、10 歳の時初めて、「子ども盆踊りは子どもがたたくのがいいな。友達つれて遊びに来いよ」と言われ、気がついたら太鼓をたたいていたという。
　取材での臨場感でいうと実際、子どもたちの太鼓はかわいいよりもダイナミックで、踊る手をとめて見入ってしまいそう。
　「子ども盆踊りで生の太鼓が入るのは珍しいんですよ。たいがいはテープ。しかも子どもたち。生は迫力が違います」
　子どもたちの前にたって指導する 2 代目、正彦さんと負けず熱心な学さん。
　「子どもたちは小さくてもたくさんの人と関わる場に行きます。どこに行っても恥ずかしくないように、まず人として礼儀作法を指導します。あいさつだけでバチももたず、練習終わってしまう時もあります。」
　子どもたちが太鼓を始める動機はさまざま。子どもたちの変化はどうだろうか？
　「いろんな習い事をしても長続きしないという子が太鼓をみて入ってきて、すぐやめるかなと思ってたら長く続いたり。親が奨めて入るより、本人がやりたいと入った方が納得して続くようです。また内気だった子がはしゃいで回りの子と仲良くなったり、自分を思い切り出せるようになったり、集中力も高まっていますね」
　太鼓のバチをもつと愛らしい小さな女の子も凛として見える。
　「女の子は平均、根性ありますね。練習では教える方も熱が入って叱ったりすると男の子はぷんとふくれるけど、女の子は泣いててもやる。負けないんですね。そんな風に子どもが熱心なら、熱意にひっぱられるように父兄も一生懸命です。」

【親も子も一緒に熱くなる太鼓パワー】

　幼稚園の年長から太鼓をはじめたあいの里鴻城小学校 5 年の三谷将也くんは、お祭りでみたあさひ太鼓に一目ぼれ。札幌あさひ太鼓のオリジナル曲などここで学べる全曲を覚えたいと意欲的。息子に刺激され、お母さんも一緒に太鼓を打ち鳴らしている家族ぐるみの太鼓一家。
　また、今年 5 月に入会した篠路小学校の松本朱夏さんは、
　「ヨサコイとかはみんなやってるし、何か皆がやっていなさそうなものがいいなと思って始めました。最初はマメができた。先輩たちは上手でかっこいい。もっとうまくなりたいな」
　いやいや、すごく上手い！立派！素人の記者には、そろいの太鼓は立派と感動の一言だが、石丸学さんに言わせるとリズムが違ってバラバラ、と厳しい。
　「たたいている子も何がちがうかわからないでしょうね。でも自分で気づいて身につける勉強をしてほしいんです。子どもたちには勇気をもってたくましく、まっすぐに育って欲しい」
　盆踊りではどこかの町で子どもたちの太鼓を見たら声援を。魂に響く太鼓の音をずっと

響かせてくださいね。
（写真・取材文　斎藤克恵）

石丸流札幌あさひ太鼓
札幌市北区篠路 10 条 3 丁目 7-26
電話／011(771)6610　FAX／011(771)9250

「創作音楽劇」で環境教育を

うたごえサークル『春の森』

「ミュージカルと呼ばないでほしいのです。振付けはあるけれど踊りだけの場面はないので。自然の命の営みをテーマに歌い伝える、それがメインの『音楽劇』のサークルなのです。」そう語るのは、うたごえサークル『春の森』で脚本・作詞・演出を手がける関山昭子さん。『春の森』は来年で結成 20 周年を迎える。すでに全道各地で 300 を超えるオリジナル曲で公演してきた。今年もまた次の舞台にむけて最終チェックに余念がない。取材当日、学校解放の一室で行われている練習の合間をさいていただき、さらに詳しくお話をうかがった。

【うたごえサークル『春の森』発足】

「1985 年の国際森林年を記念して小学校の教師数名と市民によびかけて、合唱団として結成しました。私自身、自然保護にとても興味があります。音楽を通じ、子どもと大人がともに湖沼の植物や小動物へのマナーを知る学びと実践の場をつくりたかったのです」と関山さんは語る。

合唱団？最初は歌うだけだったのだろうか。

「初めは大人や子どもあわせて 100 人規模の合唱団。でも子どもたちは歌っている間にじっとしてない。そこで、歌にあわせて振付けつけてみたら、子どもたちも楽しそうで。それで現在の歌と振付けの構成になりました」。脚本・作詩は全て関山さんが各地の自然観察と取材に基づき、創作したものだ。他に作曲家、自然環境問題の考証など、多くの専門家が支えている。

【大人とともに学び、成長する楽しさ】

『春の森』は現在、大人 20 名、子ども 14 名で構成。6 才から 78 才までと団員の年令も幅広い。自然をテーマにした脚本を通じて子どもと大人がともに生命を学ぶ、ゆるやかなコミュニティがある。幼少期から大人になるまで、ここで活動して育つ子もいるという。子どもと一緒に参加しているという渡辺美栄子さんは語る。「私は、14 年前に子どもが小学校 2 年生のころから参加しています。最初は自然環境について学ぶためでした。参加していくうちに自然への興味がわき、子どもとの共通の会話や共感が持てるようになりました。家庭も明るく楽しくなったのが喜びです」

姉妹で参加している斉藤愛華さん（11 才）智子さん（9 才）にも話をうかがった。「ここに来るのがとても楽しい。違う学校の子と友達になれる。自然について関心が深くなりまし

た。話すことが苦手だったけど、近頃うまくなったねっていわれるの。合宿も楽しいしね。大変といえば、新しく入ってきた人に振付けすることかな」

【環境教育で心豊かに】

　子どもが振付けをするとは？合宿とは？再び関山さんに尋ねてみた。「子どもの振付けは子どもたちで考えて踊っています。歌に感じとったことを自分たちなりに表現していくのです。新しい子がきたら、子どもどうしで教えあう。なにもかも大人のお仕着せでは面白くないでしょう。その作業の中で感性、自主性、おたがいを思いやる心を育てていってほしいのです」「合宿は年に 1 回。1 泊から 2 泊、脚本の舞台となる場所で行います。サロベツ湿原、道民の森、えりも町、八雲町、大雪山など。舞台表現はもちろん、自然観察を通じて命の尊さを知る、環境教育の場なのです。ここを巣立った子どもたちの中には、環境問題に関わる仕事や海洋学を専攻した子もいます」
　『春の森』の思いは確実に子どもたちの心の中に種がまかれ、実を結んでいるようだ。参加している子どもたちの瞳が実にいきいきと輝いているのが印象的だった。
　最後に、これからの抱負を。「来年は 20 周年。もっとにぎやかにしたいですね。もっともっと参加してくれる子どもが増えてほしいです」
　参加者大募集中とのこと。参加資格は不問。『春の森』からかけがえのない優しさの種が多くの子どもたちの中で芽吹くことを願ってやまない。
（取材・文　長谷川宏美）

うたごえサークル『春の森』　代表　水本桂子
入会金／大人 1000 円、子ども 500 円　月会費／大人 1000 円、子ども 500 円
練習日（定例）／大人：毎週火曜日 19：00〜21：00、子ども：毎週土曜日 13：00〜16：30
連絡先　渡辺美栄子・電話／011-853-7073　田中陽子・電話／011-881-6628

子どもたちの感受性と表現力を養う

劇団「フルーツバスケット」

【演じる者と観客との感動の共有の大切さを意識した芸術的技術の発表の場】

1993 年 4 月、芸術文化を通して子どもたち一人一人が個性豊かに育つことを目的として結成された劇団「フルーツバスケット」。

2 歳から高校 3 年生までのたくさんの子どもたちが、年齢や達成レベルに合わせてクラス編成され、週に 1 回ないしは 2 回の稽古に励んでいる。

設立当初は児童劇団として発足したが、やがて平成 7 年からは 45 歳以上の大人たちを対象にしたクラスも加え、公演の内容に新たな展開が加わった。

設立後、毎年参加している児童コンクール北海道大会では度々上位入賞を果たし、幾度も全国大会への切符を手にした。また、昨年 9 月に既に第 9 回を迎えた独自公演は、2000～3000 名の集客動員を毎回のように達成し、完成度の高い公演に固定ファンも増えていると言えそうだ。

また、平成 7 年からは YOSAKOI ソーラン祭りにも出場し、昨年の出場ではファイナルステージへ進み第 9 位、組織委員会会長賞を受賞するなど高い評価を受けている。

【個々のレベルにあった環境で子どもたちの秘めたる可能性を最大限に引き出す活動】

同劇団での子どものレッスンクラスは、「さくらんぼ」「アップル」「ストロベリー」などかわいらしい 10 ほどのフルーツ系の名称のクラスに分かれ、曜日と時間帯を変えて稽古をしている。

各クラスともある程度のレベルにより選別され次なるステップを目指す子どもたちの励みともなっている。また、チャレンジコースと称してジャズダンスやヒップポップ、タップダンスなどのコースも用意され、より自分を磨きたい人にも対応している。

講師陣も充実している。代表のきくち美由紀さんは、元幼稚園教諭という異色の経歴を持つフリーアナウンサーでもあり声優でもあり、演技全般の指導にあたっている。

また常勤のダンス指導講師として、幼少の頃からジャズダンスをはじめヒップポップやタップダンス、クラシックバレエなど幅広いダンスに精通している加勢奈緒子さんは、現在 REMIXArt＆Dance（主宰・堀裕子）に所属しながらダンサーとして、あるいは YOSAKOI ソーラン祭りや数々の舞台のダンス振り付けのほか TVCM やイベントにも出演するなど活躍している。

そのほかにも特別講師として日本舞踏や歌唱指導、各種のダンス指導にと多くの講師陣が関わっている。同劇団では新しい仲間を募集している。自己の可能性を試してみたい子ど

もがあればここで夢を育むのもまた楽しい。
（取材・文　ユメオ）

劇団「フルーツバスケット」
札幌市中央区大通西 14 丁目山田ビル 2Ｆ有限会社エッグ内
電話／011-271-7077

映画を通じた親子の交流

子どもによい映画を見せる会

　映画を通じて親子の触れ合いを応援する―それが、ボランティア団体「子どもによい映画を見せる会」のコンセプトである。札幌を拠点とし活動しているが、これまでの道のりは決して平坦ではなかった。会の石川まち子事務局長にお話を伺った。

【込められた想い】

　「子どもによい映画を見せる会」の歴史は、1981 年にまで遡る。札幌市内の小学校の校長先生たちが中心となって、会を発足させた。毎年上映会を開催していたが、89 年に活動を休止。
　会を再結成させたのは 97 年。これには、子どもを取り巻く環境への、有志たちの強い想いがあった。子どもが子どもらしく生きるということが、見失われがちな時代。とりわけ「情操教育の場が必要だ！」という想い、そして、映画に秘められた可能性―総合芸術としての、「心の共感をとりもつための手段として」の映画―に対する想いが、会復活の原動力となった。
　活動内容は多岐にわたる。年に何度か開かれる上映会の際には、しばしば演奏会をフィーチャリングさせることで魅力的な空間を創り上げる。12 月にはクリスマスコンサート、1 月にはおもちつき大会を開くなど、親子交流の場となっている。更に、活動における工夫は、会報 1 枚にも表れている。
　「本当に伝えたいところは、（パソコンやワープロではなく）手書きで作っています。タイトル部分の虹の色は、1 枚ずつ 1 本ずつ塗っています。こんなところにも、こだわりをもってやっているんですよ」
　現在、活動の中心となるスタッフは 7 名。他に、「おたすけスタッフ」の存在が会を盛り上げている。

【苦労はあっても、ふっとんでしまう！】

　活動を再開して、今年で 6 年が経つ。活動をやっていて一番良かったと思うのは、上映後にお礼の手紙をもらう時であるという。
　「読み聞かせの会の後、参加していたお母さんからお手紙を頂きました。その方は、ある障がいをもっていらっしゃって、子どもから行こうと誘われていたんですが、初めはためらっていたそうです。でも『実際に足を運んでみて、親子で楽しい時間を過ごせました』という内容でした。活動に色々と苦労はあります。上映会のホールは 1 年も前から予約してお

かなければなりませんし、資金繰りの一環としてフリーマーケットに参加することもあります。でも、こんな風に『楽しかった』『よかった』といわれたら、そんな苦労はふっとんでしまいます！」
　参加した親子が感じた想いは、スタッフたち、ひいては活動全体に新たなモチベーションを与えている。

【親子で時間と体験の共有を】

　親子が一緒に何かを共有することは、親にとっても子にとっても、かけがえのない宝である。
　「親が子どもと接している時間というのは短いものです。だからこそ、一緒に観て欲しいです。上映会では親も一緒に観ているということで、子どもは安心しています。子どもは論理的には話せません。何年か経って、その子がふと映画のことを話し出したときに、『そうだったね』といえるような、時間や体験を共有してもらいたいですね」

　大切な人から安心感や信頼感を得ることは、子どもにとって豊かな情操を育んでいくきっかけであろう。これからも、会における交流が親子にとって素敵な時でありますように。
（取材・文　加藤敬義）

イベント

札幌市市民活動サポートセンターオープニングイベント　パネル展参加
とき：9 月 1 日（月）～9 月 7 日（日）
ところ：札幌市北区北 8 条西 3 丁目　札幌エルプラザ
連絡先　札幌市市民活動促進担当課
TEL　011-280-5889　FAX　011-272-5525

男女共同参画センターフェスティバル「ワークショップ」
特別企画「ハッピーバースデー―命輝く瞬間（とき）―」を見て語ろう
とき：9 月 2 日（火）【1】13：30～15：30　【2】18：30～20：30
ところ：札幌市北区北 8 条西 3 丁目　札幌エルプラザ
定員：100 名／1 回　参加料：500 円

雪わたりコンサート
とき：11 月 8 日（土）
ところ：札幌市中央区北 7 条西 6 丁目　北海道クリスチャンセンター　ホール

子どもによい映画を見せる会
札幌市中央区南 3 条西 12 丁目　三和ビル 4F　北海道フィルムアート内
電話／011-520-5353　FAX／011-520-5500

礼儀を学び、体を鍛え、心を磨く
～武道を通じて青少年の健全な精神と体を作ろう～

NPO 法人札幌青少年育成会

札幌市西区琴似は、札幌でも有数の繁華街。明治 7 年、日本でも初めての屯田兵村がつくられた地である。その屯田兵たちの守護神を祭った琴似神社の敷地内に 30 年前青少年の健全な心身育成のためにと宮司さんが琴似武道館を建てた。

当時、札幌には武道ができる場所として中央体育館があるだけだった。1966 年、琴似神社に武道館が造られると全市から青少年たちが殺到したという。

97 年、琴似武道館は老朽化のために取り壊し、更地となった。子どもたちの活動の場は現在、琴似中学校の格技室に移り、地元の商店主や住民らが琴似武道館に替わる新しい青少年健全育成のための武道館を建設しようと会合をもち、99 年、NPO 法人札幌青少年育成会（理事長・山地弘高）を設立した。

【健康な体に宿る健康な心】

現在、琴似中学校の格技室に拠点を移した琴似武道館（NPO 法人札幌青少年育成会）が運営する武道教室は柔道・剣道・空手道。各々週 2 回の練習があり、毎日子どもたちは元気に武道に励んでいる。運営は、会費でまかなう。事務局の内野悟さんに青少年育成会がめざすものと子どもたちへの思いをうかがった。

「武道が教えることは試合に勝つことではなく、心と体の鍛錬です。苦労に耐える強い心を養い、基本に忠実に正しく、まっすぐに学ぶ。その結果として自分の中に蓄えられる将来への資質を育てることができる。空手に来る子には強くなりたい、いじめにあわないように…と自己防衛のために来る子もいる。今の中学生はこんな時代に生まれ楽じゃない。しかし、武道を長く続けている子はみんなしっかりしているし、それが心の支えとなっていると感じる」。

【礼儀に始まり礼儀に終わる】

元気な子どもたちの様子がみたい。さっそくおじゃましたのは、空手の教室。武道の一歩はなんといっても礼に始まり、礼に終わる。礼儀正しい子どもたちは一礼して格技室に入ってくる。空手道の流派は和道会。現在通ってきているのは、小学生が 27 人、中学生 13 名、高校生が 21 名、それに一般・大学生などが 10 名ほど。

指導にあたっているのは佐藤壽一部長を筆頭に 6 名ほどのボランティアメンバー。

大きな円になってまずウォーミングアップ。準備体操、基本のつきけりをして。形の練習

を行う。女の子の胴着姿もかっこいい。元気な気合の掛け声にきゅっと気も引き締まる。
　子どもたちは、西区周辺の色々な小中学校から通っている。普段の学校生活とはまたちがう空手を通した友だちがここにはいて、毎年夏の合宿では大いに盛り上がるという。

【大人は良い悪いをきちんと教えてほしい】

　休憩時間に子どもたちの指導に当たっていた栗村真知子さんにもお話を伺った。栗村さんは空手を始めて 20 年。この道場の子どもたちの大先輩だ。
　「ここには体の丈夫でない子も来ていますが、休まず頑張って通ってきています。空手を通して心身ともに元気になってくれればと思います。お母さんたちは、言うことときかなかったら厳しく叱ってくださいといわれます。礼儀は武道の基本。あいさつがちゃんとできるか、それは普段の態度が大事。それに子どもたちは良い悪いを親の顔色を見て判断します。大人は良いこと悪いことを毅然としてきちんと教えないとだめですね」
　時間とともに、高校生、大学生の生徒たちも集まってくる。
　小学生からずっと通っている大学生もいるという。一度受験などでやめても再び通ってくるものもいる。そして進んで小さな後輩たちの面倒をみ、指導に加わる。年齢を越えて大きな者が小さな者たちを育てていく。
　練習が済んだ小学生のひとりに「空手どう？」とたずねる。「楽しいよ」と元気な答え。さわやかな笑顔がとてもいい。
　「武道の精神を学び、空手がいくつになってもずっと続けられる大好きなスポーツになってくれたらいいなと思います」。
　大好きな子どもたちやスポーツと一緒に汗流す栗村さん、みなさんは最近嬉しい汗流していますか？
（取材・文　斎藤克恵）

NPO 法人札幌青少年育成会
札幌市西区琴似 1 条 3 丁目 3-11
電話・FAX／011-667-0538

えぬぴおん☆特集コラム

「アンバランスな青少年のココロとカラダ」
〜氾濫する性情報と性産業の影で

女子高生の妊娠告白から

　私がその女子高生と出逢ったのはごくごく最近のことである。偶然逢えば世間話をする程度の顔見知りだったが、いつしか私は進路のことなど悩み事の聞き役になっていた。
　そんなある日、がっくりと肩を落とし壁にもたれかかる彼女の姿を見た。やがて私の携帯が鳴る。泣きながら話す彼女の声は言葉にならない。
　断片的にやっと聞き取れた単語をつなぎ合わせ、大好きな彼氏の子を妊娠したことが判った。妊娠２ヶ月。その後私は彼氏とも話をした。彼は彼女と結婚したいという。そして赤ちゃんも育てるという。彼女もまた同じ気持ちだった。私に反対する理由などない。それどころか私は彼女たちの応援者となっている。
　ここで大切なのは産み育てようとする若いカップルのまだまだ幼い心のケアと支援だと思う。決して世間体や年齢や金銭的問題などで小さな生命を犠牲にしてはいけないと私には思えた。
　彼女たちの気持ちをそんな理由で否定することはナンセンスであると思ったのだ。それゆえ、例え彼女たちの親が反対しても応援し続けたい気持ちでいっぱいだった。

家庭での性教育はどうなってるの？

　今の社会では家庭での性教育がほとんどなされていないのが現状ではなかろうか。親子の対話などないという家庭が多い中、性教育だけは行われているとは考えにくい。
　では学校現場ではと見てみると、小学校では今だ性交ではなく交尾やおしべとめしべなのだと聞いたことがある。中高生ともなれば性への関心は強く、疑問だらけで知識が乏しい中、身体が欲するまま感情の向くまま走ることもしばしばであるという。
　最近は弱年層の性感染症クラミジアの発症が激増しているという。ある調査では中高生の性の悩みは多岐に渡り、妊娠のメカニズムや避妊のことなど基本的な興味と疑問が不確実で希薄な情報の中で入り乱れ、心と身体の発達のアンバランスが顕著に現われ始めている。
　氾濫する情報を抑え、正しい情報を共有できる社会の形成が急務のように思われる。
（ユメオ）

☆おすすめの本

「シンデレラ王子の物語」
バベット・コール著
上野千鶴子訳（松香堂）